



こーひーぶれいく

23号館と文翔館 — 100年の重み —

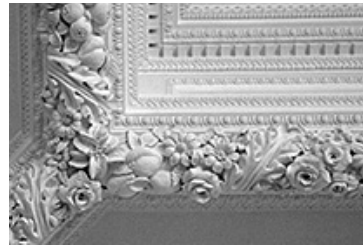
二ツ川章二

Futatsukawa Shoji

メンテナンスのために当協会駒込本館の天井の板が剥がされると、漆喰文様の天井が現れた。なぜ、わざわざ天井板が貼られていたのか？その謎は、山形県郷土館文翔館を見学したときに解明した。ボランティアガイドの説明によると、戦時中は漆喰飾りが落下しないよう板が貼ってあったとのことである。今、文翔館の天井は、それは見事に漆喰の花飾りに復元されている。漆喰の花びらを一枚一枚作り上げる復元工事は一日に40cmしか進まなかったとのことである。

文翔館は大正5年、102年前に山形県庁舎及び県会議事堂として建設された。昭和50年まで県庁舎として使用され、その後、10年に及ぶ修復工事により、平成7年に復元された。現在は、重要文化財として保存され、建物の一部が一般公開され、郷土の歴史や暮らしに関する常設展示コーナー、復元工事を紹介する映像ホール等が設けられており、いつでもボランティアガイドが丁寧に説明してくれる。また、県民の文化活動の発表の場として議場ホール、ギャラリー、会議室等が開放されている。

文翔館を案内していただくと、協会本館とよく似ているところがある。木製窓にはめられているガラスはいかにも手作りや光を乱反射させ波打っている。木枠の窓はバルンサーによって任意の位置で止めることができる。文翔館ではギィギィーと音を立てながらも途中で止められていたが、協会本館ではバルンサーと窓枠を結ぶテープが手に入らないうえ、メンテナンスをする職人がいないため、任意の位置で止めることはできなくガタギシと開閉だけされている。また、会議室で使われているベルベット生地を張った木製椅子も同じであった。何故なの



文翔館天井漆喰飾り



文翔館正面



駒込本館天井

か？文翔館を設計した田原新之助は岩崎邸をはじめ三菱系の建造物を数多く手がけ日本建築界の基礎を築いたジョサンア・コンドルの内弟子である。協会本館は大正8年、99年前に三菱造船（株）研究所として建設されたとのことである。文翔館も協会本館もルーツは同じなのかもしれない。駒込にあった旧理研の多くの建造物は、理研、科研製薬の移転に伴う駒込グリーンコート再開発のためにことごとく解体され、現在は23号館と称される協会本館だけとなった。当協会もRI施設の川崎技術開発センターへの移転に伴う本部再開発において23号館をどうするのか、重い決断を迫られている。

((公社)日本アイソトープ協会)